



図書館報

SEINAN GAKUIN
UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN
2006.October No.161



新企画

世界の図書館 イギリス編

- | | | | |
|-----|---|-----|--|
| 1 | 世界の図書館、
あるいはマルタがマリアに変わる場所
図書館長 後藤 新治 | 4 | 知らないと損をする! レポート・論文作成法
図書情報課 司書 相田 英美子 大学院国際文化研究科 中村 貴 |
| 2-3 | 世界の図書館 イギリス編
文学部 英文学科 助教授 三宅 敦子
国際文化学部 国際文化学科 助教授 今井 尚生
経済学部 経済学科 教授 仲澤 幸壽 | 5-6 | 使ってみようシリーズ(5)
学術ポータル編 図書情報課 長岡 武史 |
| | | 7 | 蔵書ギャラリー no.2 文学部 英文学科 教授 金子 幸男 |

SEINAN
GAKUIN UNIVERSITY

新企画 世界の 図書館



あるいはマルタがマリアに変わる場所

図書館長 後藤 新治

ひとが文字を発明し、それを記録として残したいと思った時に「図書館」が誕生したのだとすれば、その歴史は古代にまでさかのぼります。紀元前3世紀頃エジプトのアレクサンドリアに創建された図書館 *bibliothèque* は数十万巻にのぼるパピルス蔵していたといわれます。ここは学術研究機関ムセイオン *mouseion* とともに当時の学問の中心地でした。このムセイオンが博物館 *museum* の語源になっていることは、図書館と博物館の密接な関係を暗示しています。中国では紀元前2世紀頃漢の武帝が最初の国立図書館構想を懷いたといわれ、また日本では8世紀に文人の石上宅嗣（いそのかみやかつぐ）が私邸に設けた芸亭（うんてい）が公開図書館の嚆矢であったとされています。

その後ヨーロッパでは中世の修道院や大学に書写室を兼備した付属図書館が設けられ、ルネサンスの活版印刷術発明と宗教改革を経た後の絶対主義体制下では王立や国立の図書館が納本制度なども採用しながら蔵書を充実させていきました。これらを母体に近代図書館が誕生したわけですが、21世紀を迎えた今日図書館はさらに大きな変貌を遂げようとしています。「図書」の電子媒体化、図書館相互の巨大なオンラインネットワーク、さらにはそれに伴う情報リテラシー教育の必要性など、日々刻々と変わりゆく図書館の現状は周知の通りです。

しかし将来いかなるかたちをとるにせよ、必要にして十分なデータが利用でき、かつ「瞑想的生 *vita contemplativa*」の空間が保証されている限り、わたしたちはそこを「図書館」と呼んでいいのではないのでしょうか。ルカによる福音書の譬えでいえば（10：38-42）、広大な情報の海を泳ぎながら、わたしたちの中のマル

タ（活動的生 *vita activa*）がマリア（瞑想的生）へと変身を遂げる場所こそが図書館を図書館たらしめているのではないのでしょうか。

そこでこの問題をみなさんと考えるために「世界の図書館」を新たに始めました。シリーズの目的は以下の3点です。

- 1) 世界の主要な図書館の歴史と現状を認識することで、多様な図書館像を知るとともに、世界の図書館で今なにが問題になっているのかを考えてみたい。
- 2) その中で西南学院大学図書館の将来にとって、何か参考にすべきアイデアやヒントのようなものがあればその可能性を探ってみたい。
- 3) 世界の図書館の外観と内観を写真で紹介することで、建築表象としての図書館イメージの問題をあわせて考えてみたい。

鎖に繋がれた羊皮紙の写本を書見台の上でめくっていた時代から、モニター上で世界中のデータベースに即刻アクセスできる今日に至るまで、図書館建築とはひととメディアの公的インターフェース空間であり、一方で図書の分類と書架の配列はその時代の知の体系を視覚化したものにほかならず、近代的自我が形成された「瞑想の場」あるいは「記憶の場」としての図書館空間の構造を比較検討してみたいという、個人的な願望もそこには隠されています。

「蔵書ギャラリー」ともども、教員や職員の方々の格別なご協力を切にお願いする次第です。今後ヨーロッパや北米はもとより、アジア諸国や中南米、中近東や東欧、ロシア、そして日本の特集も計画しています。ご期待下さい。（国際文化学部 教授）

[イギリス編]



[セント・パンクラスの新しい大英図書館]



[トリニティ・カレッジのレン・ライブラリー]



[ヨーク大学キャンパス全景]

大英図書館

The British Library : St Pancras 96 Euston Road London NW1 2DB
<http://www.bl.uk/>

文学部 英文学科 助教授 三宅 敦子

皆さんがもしロンドンに行くなら訪れたいのは、バッキンガム宮殿、それとも大英博物館？実は今回ご紹介する大英図書館(The British Library)は1997年までこの大英博物館の中にあったのです。

私が始めてこの大英博物館の中にあった大英図書館を利用したのは、イギリス留学中の1994年のことでした。当時は大英博物館図書閲覧室(British Museum Reading Room)という名称で大きなドームのある部屋でした。MA論文に取り上げた19世紀のイギリス人女性作家が編集していたThe Christian Lady's Magazine(1834-1846)の全巻と彼女の自叙伝を閲覧するためです。とはいえオンラインデータベースやインターネット、メールなどなかった時代です。書籍のみならず写本や手書き原稿まで含めると1億5千万点にも及ぶコレクションの中から見たい書籍を探すのは一苦労。まず図書閲覧室に到着したら、部屋の中央に位置するカウンター近くにある何十冊にも及ぶカタログ(蔵書目録)をあけて閲覧希望図書の請求番号を書類に記入します。それをカウンターに持っていくと所蔵場所に依拠して、30分～数時間後、遅くて数日後に書庫から持ってきてもらえるというシステムでした。申し込みが済むと指定された日時に再度図書閲覧室に出向き、緑色の革張りで書見台までついた立派な座席を確保して閲覧します。マルクスがほぼ30年もの間、毎日のようにこの図書閲覧室に通って同じ席に座り『資本論』などの著作を執筆したことは有名な話です。初めてこの丸天井の下で勉強した日、私は風邪を引いておりうっかり咳をしてしまいました。静謐な空間に突如として吐き出されたその咳は、唯一話し声のするカウンターから部屋の端へとまるでそよ風が水面に生み出す小波のように広がっていく人の声の中



大英博物館図書閲覧室

にポチャンと投げ捨てられた小石のようで、思わず身を縮こまらせてしまいました。

そんな荘重な雰囲気の中で過ごした日々は私に研究のすばらしさを教えてくれました。今となっては簡単に読むことが出来ない雑誌を読んでいると、まるで私が当時の読者になったかのような気分になりましたし、英語だけでなくフランス語やスペイン語が飛び交いアラブ系の人たちの顔も見え隠れするその部屋にいて、まだまだ研究者の卵であった自分があたかもひとかどの研究者であるかのような気分になり、自分も立派な研究者になりたいという願望がふつふつと湧いてきたものです。

蔵書保管と閲覧の利便性を向上させるべく移設されたセント・パンクラス駅西隣の大英図書館は大変立派な外観で遠くからもよく目立ちます。カタログはすべてオンラインとなり日本にいてもウェブ上で図書の検索や閲覧の請求のみならずコピーサービスの依頼をすることも可能になりました(HPは HYPERLINK "<http://www.bl.uk/index.shtml>").ただ残念なことに大英博物館図書閲覧室時代の荘厳で静謐な雰囲気は失われてしまいました。現在の大英図書館は近隣のロンドン大学の学生をはじめ、だれもが気軽に訪れリサーチをすることが出来る明るくてモダンな雰囲気の図書館に生まれ変わっています。

ロンドンを訪れることがあれば、ぜひ大英博物館と新しい大英図書館を訪れてみてください。公開されている大英博物館図書閲覧室を訪問し、新しい大英図書館のレストランで雰囲気を味わいながら、まずいことでは定評のあるイギリス料理をお腹いっぱい食べた後は、1階のショップでお土産を探してみるのもよい旅の思い出となることでしょう。

ケンブリッジ大学とは30以上のカレッジ (College) と各学部 (Faculty) の総称であり、図書館も幾つかの種類に分かれる。カレッジの方が歴史的に古く、最初のカレッジであるピーターハウスが設立されたのは13世紀。この他イギリス随一の聖歌隊とチャペルを誇るキングス・カレッジ、ニュートンの活躍したトリニティ・カレッジなどがある。各々は経済的にも独立しており、個別の図書館を有している。カレッジは学問分野ごとに設立されているわけではないから、一つのカレッジに属する教員や学生の専門は様々であり、当然図書館の蔵書も種々の分野に亘る。しかし近代になると、学問が高度に専門化したことに対応するため、専門を同じくする教員からなる学部が組織された。学生は一方でカレッジに属しながら、他方で専門の講義を聴講するため、自らの選択した学部にも属することになる。各学部はその学問分野の文献を収集した学部図書館を有している。これらに加えて大学全体の総合図書館がある。開館は1934年と新しいが、600万冊を越える蔵書・写本類を保管する。そしてこれらすべての図書館はオンラインで結ばれており、探している文献がどこにあるかは容易に検索できるシステムが構築されている。

これらの各図書館に分散して蓄えられている蔵書の一つのテー

マに従って集め、一般の市民にも公開する興味ある企画の一例を紹介しよう。2005年の秋には“The Cambridge Illuminations”と銘打って、中世の写本の展示がなされた。総合図書館はスペースが狭いため展示は一部に限定される。各図書館が所蔵する写本を一堂に集め、分類して展示する役割を果たすのは、大学に属する



Q.11の設計によるレン・ライブラリー閲覧室(トリニティ・カレッジ)

フィッツウィリアム博物館である。ここでは常設展と並んで、年に何度かこのような特別展が開かれ、その都度詳細な解説付きのカタログもあわせて出版される。イギリスの博物館は基本的に無料であるから、子供達を引率した小中学校の先生がしばしば訪れて、実物を前にしながらの教育を行う。このときはカリグラフィーの実演が行われ、実習室で子供も大人に混じって実際に装飾文字を書いてみるという体験を

させてくれていた。この特別展はとても人気があったと見えて一ヶ月くらい期間が延長された。さらに2005年の夏には特別展に先立って、中世の文化に関する夏期特別公開講座も大学で開かれていた。このように大学、図書館、博物館が大々的に連携して専門的研究プロジェクトを推進し、一般市民にもその学問的成果を享受出来るようにする企画はケンブリッジ大学ならではのものと言えよう。

ヨーク大学図書館

J.B. Morrell Library, University of York : Heslington York YO10 5DD
<http://www.york.ac.uk/services/library/>

英国の大学図書館のイメージというと、荘厳な建物の中に歴史を経た書籍が並び、知的で厳格な風貌の司書に迎えられといったものかもしれません。しかし、私が滞在したヨーク大学の図書館(J. B. Morrell Library)は違っていました。大学自体が新設のため、図書館の意外にモダンなデザインやスチール製の書架、検索用の端末装置やパソコンデスク等々、日本でも見慣れた光景だったのです。

見た目は似ていましたが、違いを感じたのは、何にでも合理性が浸透している点でした。私の滞在目的は経済心理学という経済行動の合理性をテーマにする研究だったので、英国滞在では合理性がすべてのキーワードだったのです。例えば、図書館の予算制度です。日本の大学では、年度途中で予算の用途を変更することは困難です。しかし、ヨーク大学では、新規に発刊される学術雑誌の購入開始やweb版の導入等が大きな予算変更をとまなうものでも、容易に行えるとのことでした。学会の動向に合わせて、その時々に必要なものが揃えられる体制でなければ不合理だという訳です。羨ましい限りです。

また、受益者負担の原則も合理性の一例です。図書館の中には、西南と同様にパソコンが備えられ、学生がレポート作成に励んでい

ます。パソコン利用は有料で、多く使う人ほど多く払うというシステムです。プリペイド式で、残額が無くなるとログインできません。しかも、レポートはパソコンで作成したもののみが提出可能です。授業料がカバーする範囲は限定されていて、それ以外のサービスには別途料金徴収が当然という発想です。パソコンの使用料は自前で購入するよりは割安ですが、日本の大学に比べると学生には厳しいかもしれません。

合理性が浸透していると、困ることもあります。研究上必要な学術雑誌類は、学生でも閲覧可能な開架に配置してあります。日本でもそのような大学は数多くあります。ところが、いくつかの著名な学術雑誌は事務室奥に格納され、閲覧手続きが煩雑でした。重要な論文が掲載された号が無断で持ち出される事件が多発したためだそうです。見つからなければ持ち出してしまうというのは合理性の悪しき面で、経済心理学でも危険視する行為です。ここで英国の合理性は安易に性善説に頼らずに、図書館の出口に厳格な風貌の守衛(司書ではなく)を配置し、退出時の手荷物検査を要求します。西南のようにバーだけだと、乗り越えてしまう人もいるかもしれませんから。経済心理学的には納得できる状況ですが、コメントは難しいです。



開架書架／閲覧室風景

知らないと損をする！
レポート・論文作成法

図書情報課 司書
相田 芙美子

『文献を探す力』

みなさんは、普段、レポートや論文に必要な文献をどうやって探していますか。また、自分の「文献を探す力」がどのくらいのレベルか理解していますか。

レポート、論文には裏づけとなる文献(情報、資料)が必要になります。その時、どうやって見つけるか、どれぐらいの手間をかけるか、そこが「文献を探す力」の力を測る尺度になります。授業の予習復習で忙しい毎日、提出するレポート、論文の期限は決まっている。できれば時間をあまりかけず効率的に調べたいですね。そんな時に役に立つのが図書館の「資料相談(=レファレンス)サービス」です。専門の職員があなたの資料探しのお手伝いをします(ただし「答え」そのものはお教えできません。あしからず)。見つからなくても、あきらめて帰るのではなく、ぜひ立ち寄って相談してみてください。

試してみよう!「あなたの文献探索力(=文献を探す力)はどれくらい?」

初級レベル:「資料と入手方法について理解している」

- ◎資料には本だけでなく、雑誌、新聞映像資料などがあることを知っている。
- ◎本屋と図書館の違いを理解している。
- ◎自分の大学の図書館だけでなく自宅近くの公共図書館(県立、市立)も利用したことがある。
- ◎本の選び方を知っている。(前書き、後書き、目次、著者紹介、出版社、発行年の見方)

中級レベル:「(自分の)大学図書館を使いこなしている」

- ◎OPACを使って欲しい資料を探せる。
- ◎よく使う資料の場所を覚えている。
- ◎専門分野ごとのくわしい辞書、事典、データベースがあることを知っている。
- ◎ILLサービス(学外からの資料取り寄せ)を知っている。
- ◎参考文献や注記の見方を理解している
- ◎資料が見つからなければ、相談窓口の職員に相談している。

上級レベル:「欲しい資料に自分でたどりつける」

- ◎自分の大学図書館にない資料がどこにあるか調べることができる。
- ◎ILLサービスを使うか自分でその資料があるところまでかけて利用する。
- ◎必要に応じて、データベースや電子ジャーナルも利用している。
- ◎自分の研究分野の資料を理解している。(有名な著書、専門分野の雑誌、著名な研究者等)

大学生への「おすすめツール」

資料相談サービス(レファレンスカウンター)

[場所:1階カウンター南側]



担当がみなさんからの質問を待っています。

国際文化研究科 国際文化専攻博士後期課程
中村 貴

『図書館は自己の考えの構築にヒントを与えてくれる場です。』

レポートや論文を作成する際に、まず行うべきは先行研究の調査です。そこで国立情報学研究所Webcat plusを利用しましょう。このサイトは、キーワードを入力するだけで文献の基本情報から所蔵する大学図書館まで検索できます。次に該当図書を読みたいと思ったら、常には「考えながら」読みましょう。「考えながら」とは、自己のテーマとの関連に留意して読むということです。それによって次第にテーマが限定化・明確化され、自己の考えが徐々に構築されてくるはずです。また、本の最後にかかれている参考文献は必ずチェックしましょう。そこから関連図書が見つかり、更なる知見が広がる事がよくあるからです。

レポートや論文は、自己のオリジナリティが要求されます。ですから、先生や同級生の意見を参考にしながらも、常に自分で自己の考えを構築していかねばなりません。そして、それに大いにヒントを与えてくれるのが、図書であり図書館という場なのです。

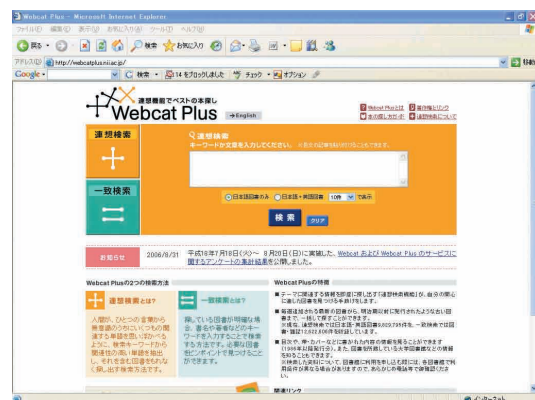
皆さん大いに図書館を活用しましょう。

大学生への「おすすめツール」

図書館ホームページ →

学術ポータル →

国立情報学研究所Webcat plus



Webcat Plus トップページ

図書の基本情報から所蔵する大学図書館まで検索できますが、検索数が多いのが難点です。個人的には大学図書館の所蔵のみを表示するWebcat(元祖)をよく利用しています。

『学術ポータル』を知っていますか？



図書館には読むための図書や雑誌以外に、調べるための図書(事典など「参考資料」と呼ばれます)やオンライン・データベースやオンライン・ジャーナルがあります。これらの「道具」を効率よく使い、求める情報にたどりつくための入口となるのが今回紹介する『学術ポータル』です。

図書館HPのメニューの「学術ポータル」をクリックします。学術ポータルの画面は本学OPAC、OPACへのリンク、パスファインダー、データベース、オンライン・ジャーナル、リンクのブロックに分かれています。それぞれのブロックについての内容は以下の図でご確認ください。

図書情報課 長岡 武史

図書館OPAC

館内の専用端末だけでなく、ここからも所蔵検索ができます。キーワード入力の基本は「単語で入力する」です。複数の単語を入力する場合は単語と単語の間をスペースで区切ってください。

パスファインダー

パスファインダーについては右ページで解説します。

データベース

利用頻度の高いデータベース(新聞記事検索や辞書・事典など)はここからアクセスできます。各データベースの内容、利用マニュアルや学術ポータルのトップページに掲載されていないデータベースについては「利用説明」をご覧ください。

オンライン・ジャーナル

本学から利用できるオンライン・ジャーナルです。サービスごとに収録対象の雑誌が異なりますので、どのサービスを利用したいかわからないときは、**「Serials Solutions」**を利用してみてください。



OPACへのリンク

本学図書館以外の所蔵やどのような図書や雑誌が発行されているかを検索するときに利用します。

[Webcat plus]

全国の大学の所蔵

[NDL-OPAC]

国会図書館の所蔵

[福岡市総合図書館]

所蔵があれば直接来館するの一つの方法

本学に所蔵していない資料もILLサービスで他の図書館から利用することができます。

ILLサービスとは

他の図書館から図書を借用したり、必要部分のコピーを取り寄せることができるサービスです。

ILLサービスの費用

実費は負担となります。ただし福岡市総合図書館から借りる場合は、費用はかかりません(近いので直接来館してもよいでしょう)。

ILLサービスの申込み

ILLサービスはOPACから申込みができます。不明点は図書館にお尋ねください。図書館報NO.159にも、ILLの申し込み方法が載っていますので、ご覧ください。

リンク

各分野へのリンクです。

オンライン・ジャーナルは、複数の雑誌をまとめて提供しているサービス形態が主流です。本学からは複数のサービスが利用できますが、目的の雑誌がどのサービスに含まれているかが分からないときは「Serials Solutions」でタイトル検索すれば、サービスを気にすることなくオンライン・ジャーナルを利用することができます。

パスファインダーって何？

パスファインダー (Pathfinder) は、あるテーマに関する資料や情報を探す際の手順や資料 (Webサイトも含む) を簡単にまとめたものです。図書館で効率的に資料 (情報) を探す際に役に立ちます。

現在パスファインダーには**21のテーマ** (10月現在※) があります。この中からたとえば「出来事・事件」の箇所をピックアップしてみます。

※テーマについては今後増やしていく予定です。

パスファインダーのテーマごとに参考資料を紹介しています。資料のタイトルと内容の説明。配架場所 (資料が設置されている場所) が記載されています。

パスファインダー／21のテーマ

図書・雑誌	国連	統計
白書	法令	福祉
出来事・事件	判例	教育
記事 (新聞・雑誌)	経済	環境
キリスト教	EU	言葉・用語
人物	企業・機関・団体	論文
地名・地図	金融	英米文学



まず、パスファインダーは

「Webで調べる」と「図書や雑誌で調べる」に分かれています。

Webで調べる

検索するためのデータベースや関連情報へリンクがあります。「出来事・事件」の場合は新聞記事検索データベース (日経テレコン、聞蔵、ヨミダス文書館、毎日NEWSパック) のほかに、事典データベースや雑誌記事検索データベース、テレビ局各社へのリンクなどがあります。

図書や雑誌で調べる

調べるための図書 (= 参考資料) や関連図書・雑誌をリストアップしています。参考資料といえば、広辞苑や英和辞典、そして現代用語の基礎知識のような「ことば」を調べるためのものがイメージされると思いますが、図書館にはそれだけでなく様々な分野についての参考資料を揃えています。調べる対象についても「ことば」以外に、図書・雑誌・歴史・地名・人物・文学作品など多岐にわたっています。「出来事・事件」の場合は、新聞社が発行している年鑑類やニュース事典、そして1ヶ月の新聞記事をまとめた新聞ダイジェストを紹介しています。

これらのデータベースと参考資料を組み合わせると、今まで以上の情報を引き出すことができます。データベースや参考資料の利用方法がわからない場合は遠慮なく図書館にお尋ねください。

情報源に注意！！

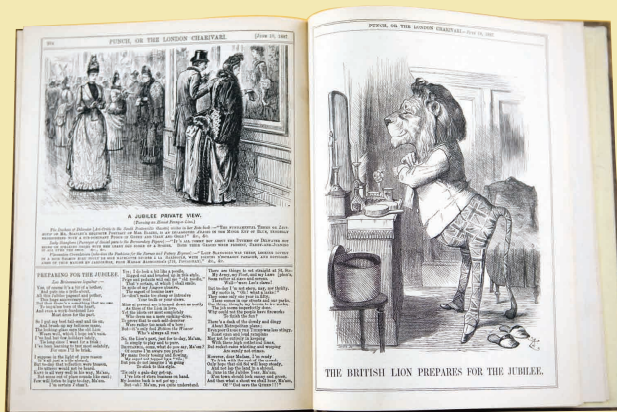
情報検索をするときは、まずサーチエンジンを利用することが多いですが、必ずしも正確な情報が検索できるわけではありません。ネット上には無数のサイトが存在し、そのすべての情報に信頼性があるわけではありません。政府や新聞社・出版社など責任の所在が明らかな情報源 (ソース) から情報を入手するように心がけましょう。

探し出した情報については
情報源をメモするようにしましょう。

図書・雑誌の場合 タイトル、出版社、著者、掲載巻号

データベースの場合 利用したデータベース、検索方法 (検索に使ったキーワードなど)、URL※

※URLは変更になることがあります。後日アクセスできないこともあるので注意してください。



PUNCH 『パンチ』

(1841/7/17-1992/4/8、
全7888巻、ロンドン)

[開架:053/0/14-]

左:リチャード・ドイルによるパンチの各号につけられた表紙絵(修正版の方で、1849年より107年間にわたり使用される)

右:ジョン・テニエルによる、ヴィクトリア女王即位50年祭を記念したカートゥーン(1887/6/18号)「イギリスの象徴ライオンが即位記念祭に出席のため、おめかしする」というキャプションがついている(右ページ)

昔は、英文学研究と言えば、作品とその批評、作家の伝記や書簡を読めば、論文は書けるものであった。ところが、この二十年くらいは、そのような研究と平行して、歴史的な一次資料を文学テキストと対等なものとして並べて研究が行われるようになり、今でもその傾向は続いている。その一次資料として一級のものが、イギリスの風刺漫画週刊誌『パンチ』である。創刊は1841年で、1992年に一応廃刊になったから、ほぼ150年間続いた大変息の長い週刊誌である。ヴィクトリア朝、20世紀のイギリス研究には欠かせないもので、イギリスの政治・社会・風俗・文化が挿絵つきで描かれた、大変楽しい読みものである。初期には過激な社会批判を行う傾向もあったが、「楽しませつつ教える」ことをマニフェストに掲げた中産階級向けの雑誌であったから、徐々に中産階級のリスペクタビリティを尊重するような書き方になっていったという。A4版のサイズで、表紙もあわせて12ページ、値段も安価(1917年まで3ペンス)であった。本図書館に入っているのは、半年単位の巻ごとに製本されたものである。

タイトルは、一説によれば『パンチとジュディ』(イギリスの有名な大衆向け人形芝居)から取ったものと言われている。夫パンチが妻ジュディと我が子に暴力をふるって殺してしまうというDVの話である。それに愛犬のトウビーがお供として登場する。創刊号の表紙絵には、この人形芝居とそれを見ている観衆を描いたものが使われたが、『パンチ』の中身がウィットに富んだ政治風刺やユーモアを売り物にしていたことと、部数が伸び悩んでいたこともあってか、幾人かの有名な挿絵画家が表紙絵に挑戦した。結果は当代随一の挿絵画家であるリチャード・ドイル(コナン・ドイルの叔父)の挿絵が雑誌のイメージに合っているということで、1844年1月から採用され、その修正版が1849年から100年以上にわたって長く使用されることになった。左上の写真(修正版)の

ように、パンチ氏と愛犬トウビーを中心におき、その間に置かれたキャンパスにはイギリスを象徴するライオンが描かれ、周りには豊饒の角と、道化やこびとの群れが妖精のように縁飾りとしてあしらわれている。タイトルは小枝のイメージで描かれており、全体として非常にユーモアラスな表紙となっている。この参考写真は、個人蔵のものを使わせていただいた。巻ごとに製本された本学所蔵の『パンチ』の表紙は巻全体の一つつけられたもので、パンチ氏を描いてはいるのだが、残念ながら各号ごとのドイルの有名な表紙とは違う。

ドイルの表紙に加えて有名なのが、『パンチ』のカートゥーンといわれる1ページ大の風刺漫画である。この館報の表紙に使われているのは、1882年5月6日に植民地アイルランドで勃発した、イギリスの閣僚暗殺事件を受けて、過激派のアイルランド人を怪物フランケンシュタインとして表象したもので、「アイリッシュ・フランケンシュタイン」というキャプションがついている。ちなみに原作『フランケンシュタイン』(1818)では怪物に名前はなく、フランケンシュタインは怪物を創造した科学者の名前であり、現在でも見られる混同がすでに現れているのが興味深い。このカートゥーンを担当した有名な挿絵画家を何人かあげておこう。ジョン・リーチ、『不思議の国のアリス』の挿絵画家であるジョン・テニエル、チャールズ・キーン、ジョージ・デュ・モーリエ、『くまのプーさん』の挿絵画家のE.H.シェパードなどである。

『パンチ』誌は、経済的理由から1992年に一度廃刊になるが、1996年に奇跡的に復刊された。そのオーナーが何と高級デパート、ハロッズの所有者モハメッド・アル・ファイドである。しかし、その彼をもつてしても、部数を伸ばすことができず、2002年に160年の歴史を閉じるようになった。

編集後記

今回の特集は「世界の図書館」です。この特集は世界各国の図書館を紹介していくもので、今後もシリーズ化して定期的に掲載していく予定です。第1回目はイギリス編として3人の方々に紹介していただきました。日本とは異なる図書館事情や重厚で趣のある建物など、日本にないがあたかもイギリスの図書館へいるような錯覚に陥ったのではないのでしょうか? この特集記事のように書物というものは学問を追及し、知識を高めるだけではなく、世界中を旅し、あらゆる時代にタイムスリップすることが出来るものです。秋の夜長、書物に触れて、世界中へ、また時空を超えた旅へ出かけてみてはいかがでしょうか? (H.I)

西南学院大学図書館報 No.161

2006(平成18)年10月27日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511

福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL(092)823-3426